

『ムスタファのことなど』

ムスタファと出会ったのは、東京のあるカトリック教会で在日アフリカ人の集いが催された時のことだった。ムスタファはギニアの出身で、解体現場で働いていた若者だった。ムスタファはカトリックではなく、ムスリムであったものの、同郷の人々との出会いを期待して、教会にやってきたのだと思う。

これをきっかけとしてムスタファと親交を深め、東京の国連機関で働くザイール人のお宅をともに訪れたり、ギニア大使との会食にも誘われることもあった。わたしはパリに留学することとなり、その留学の終わりにあたりムスタファの誘いを受けてムスタファの故郷を訪れることとなった。そこでの道中はあまりに強烈な日々で、すべてを語り尽くすことはできない。なかでもキンディアでの一夜をいまだに忘れることができない。

キンディアはギニアの首都コナクリから 135 キロほど内陸にある地方都市で、ムスタファの兄はそこにある農業研究所に勤めていた。そこでムスタファとともに研究所を訪問し、一晚を過ごした。その頃、ギニアに電気は通っていたものの停電も多く、そのため研究所では電力の安定のために自家発電を行っていた。日没後のギニアの夜は暗く、その闇は深かった。街の郊外に位置する研究所の外には底知れぬ闇が広がっていた。

ムスタファの兄はかつてモスクワに留学したことから、ムスリムでありながらもウォッカをたしなみ、遠来の客人にもロシア製ウォッカを勧めてくれた。そして食後に家族一同でハリウッド映画のターミネーターを楽しんだのである。

当時はインターネット動画は無論、DVD も登場しておらず、ビデオが映画を見る有力な手段だった。ターミネーターの近未来世界はギニア人であれ、日本人であれ、我々を惹きつけてやまない。しかし、窓の外にひとたび目を向ければそこには深い闇が広がっていた。電気や水道といった生活の基本的インフラが十分に発達していないにもかかわらず、近未来のアメリカ社会の映像をスリルにかられながら見とれてしまうことに、私は大きな矛盾を感じざるを得なかった。

これまで闇の世界と語られてきた土地にまで便利な文明生活が展開することに感嘆する一方で、彼らと私の間に大きな淵が横たわっている。私は彼方の国から飛行機など乗り継ぎ、この土地を訪れることができた。そして彼らもまた文明の発達により遠い世界を今やリアルタイムで知ることができるようになった。それでも彼らは私の土地に容易に来ることはできない。彼らはその土地に留まらざるを得ない。たとえ、その世界が今や文明の利器に満ち溢れているにせよ、それらを等し並みに享受することは容易ではない。恵まれた人々はその世界を離れる特権を使って、私の世界にやってくるかもしれない。しかし多くの兄弟たちは手段を欠き、彼らの世界にとどまっている。それも彼らの世界に外部に便利で快適な世界が展開していることを知りながら。